体育理論における演習的学習活動の実践研究

池田達也

Practice research of the exercise learning activity in a theory of physical education

Tatsuya　IKEDA

1　緒言

2008年に改訂された中学校学習指導要領・保健体育編（2008年）では､体育理論領域について、授業時数の規定と学習内容の整理・精選が図られた。しかし、実際の教育現場での指導は「雨降り単元」や「読み切り単元」と揶揄されたように[1)]、雨の日に実技の代替策として教科書に書かれている内容の暗記に留まっていることが筆者の経験からでも多いと感じる。専門誌に掲載された「体育理論」の実践数が1970年代以降ほとんどみられなくなっている[2)]、との指摘もある。また、実践研究の低調さにと同様に、体育の教科書の研究も進んでいない状況がある。「体育教科書の歩みは、実に、この学習指導要領の体育理論の歩みそのもの」[3)] と言われているように、教科書研究を行うことが必然的に「体育理論」領域の研究の深化につながることは言うまでもない。よって、実践研究と同様に体育の教科書研究も必要である。

2008年の指導要領の「体育理論」領域を見てみると、1998年の指導要領まで削減が進んでいた社会学的・運動文化的内容が、新たに記載されている。これらの内容は、スポーツの価値観やモラルを学習するものが多い。しかし、教科書内容を暗記させるような現状の講義型の授業だと、一定の価値観やモラルだけしか教えられず、自分の価値観を考えるような学習はできないのではないだろうか。演習的な学習活動が多く組み込まれた授業スタイルの方が、より豊かな価値観やモラルの学習になるのではないだろうか。

2　研究の目的

これらのことを踏まえて、以下の2つを本研究の目的とする。

Ⅰ）教科書研究

中学校で使用される検定教科書に、体育理論の内容がどのように記載されているのかを調べる。

Ⅱ）授業実践

演習型授業に注目し、その中で学習者がどのような考えを得ることができたのかを事例的に見ていく。それによって、「体育理論」特に、社会学的・運動文化的内容を教える際の演習型授業スタイルの可能性を検討することを目的とする。

研究Ⅰ　教科書研究

3　方法

2012年時点で発刊している4社の教科書の中で、社会学的・運動文化的内容を取り扱っている6つ小単元を研究の対象とした。教科書に記載されている6つの小単元について、中学校学習指導要領解説の中で解説されている内容を踏まえ、教科書に記されている内容を検討する。その際、各教科書の学習課題にも注目し、その特徴について比較・考察する。

4　結果と考察

4社の教科書の6つの小単元を、内容と学習課題の2つの観点で検討したところ以下の特徴が明らかになった。

・実例を用いた提示

スポーツのかかわり方やルールやマナーの例示のように学習内容についての実際の活動事例や具体例の有無が各教科書で違いがあった。具体例を出し、学習内容を生活化するような課題が必要であると考える。

・他の学習との関連

学習内容を独立して学習者に教授するのではなく、横断的に学ばせることによって学習者の中でスポーツ概念の体系化ができるのでないだろうか。

・枠組みの規定

思考の枠組みを規定した学習課題ではなく、自由な発想を促すようなオープンエンドの課題が良いと考える。

・生活化を促す課題

学習した内容を実際の生活場面で応用できなければ、本当に学習したとはいえない。生活場面で応用できるように、学習課題も生活に起こりえるような課題を提示することが効果的であると思われる。

研究Ⅱ

5　方法

2012年10月～2012年11月の期間に愛知県内A中学校1年生2クラス53名（男子27名、男子26名、計男子53名）を対象に授業実践を行った。単元計画は表1で示した。

6　データの取得とその分析

学習者が単元の最後の記述した自由記述回答を、分析の対象とした。その対象を以下の2つの観点で分析した。

ⅰ）対象者が授業を通して得た考えを、指導要領に記載されている解説・項目と比較する

ⅱ）対象者が授業を通して得た考えを、「スポーツ価値意識の四類型」[4] という視点で比較する

表1

	ねらい	内容
1時間目	・運動・スポーツについての思考を広げる ・考えられる運動・スポーツの価値をより多く挙げる。	1．運動・スポーツについての連鎖図を作る 2．言葉をグループ分けし，タイトルを付けていく 3．「運動・スポーツは～ため」の～に合う言葉を考える
2時間目	・スポーツの価値の多様性を感じるため，価値の重要性においての討議を行う ・資料を見て自分達の価値とは違う価値も考える ・「運動・スポーツの価値」について考えをまとめる	1．「運動・スポーツは～ため」のクラスでまとめた結果を確認する 2．6つ「運動・スポーツの」目的にランキングをつける 3．グループでランキングを統一するよう討論する 4．グループごとのランキング・考えを発表する 5．他のグループの考えに対して質問・反論する 6．資料を確認し，違うスポーツの価値も確認する 7．感想文の記入

7　分析方法

7－1　指導要領の解説・項目との比較

学習者の自由記述から「運動・スポーツの目的」に関する記述を抽出する。抽出したテキストデータを、戈木の「グラウンデッドセオリーアプローチ」[5] を援用してカテゴリーにまとめる。出されたカテゴリーと指導要領の解説・項目とを比較し考察する。

7－2「スポーツ価値意識の四類型」との比較

学習者の自由記述から「運動・スポーツの目的」に関する記述を抽出する。抽出したデータを、上杉の「スポーツ価値意識の四類型」で分類し、考察する。

8　結果と考察

8－1　授業実践の様子

授業実践の中で、「連鎖図の作成」「運動・スポーツの目的を考える」「スポーツの目的の順位付け」「スポーツの目的についてのグループ討論」「スポーツの目的についてのクラス討論」「学習のまとめ」の6つの演習的活動を行った。最後の活動の授業のまとめでは、自由記述形式のワークシー

トに記述する活動であった。自由記述回答の中から、本小単元の学習内容である、「運動・スポーツの多様性」に関する記述を抜き出してみたところ、全54の回答中、36の回答で「運動・スポーツの多様性」に関する記述が見られた。このことから、本授業の演習活動の中で、スポーツについての価値一元化では無く、スポーツの多様性の学習になったと考える。このことは、講義型と異なる性格の学習になったと思われる。

8－2　自由記述回答の分析

自由記述回答の内容と指導要領解説の内容を「必要充足」「欲求充足」で捉え比較したものを表2に示した。

表2

	指導要領解説の内容	自由記述から得られたスポーツの目的
必要充足	健康維持	健康の維持，増進 心身の成長 将来に活かす ストレス発散
欲求充足	楽しさ	生きがい 楽しさ，悔しさの獲得 金銭の受諾 達成感 他者のため 名誉

表2を見てみると、自由記述から得られたスポーツの目的が指導要領解説の内容より細分化されている。このことから、演習的活動が学習者の「スポーツの目的」を指導要領に掲げられている解説・項目よりも、より細分化され広がりを持たせることができる1要因になると考える。

8－3　「スポーツ価値の四類型」との比較

自由記述のテキストデータを上杉の「スポーツ価値意識の四類型」で分類し、4つの割合で表した結果、「レクリエーション志向」、「世俗内禁欲志向」の2つで全体の70％を占めていた。この2つは共に、スポーツを手段的に扱う価値意識である。この結果から、学習者が考えるスポーツ価値の多くが、手段的に扱う価値であったといえる。スポーツの多様性を学ばせるためには、スポーツを目的的に捉える学習を演習活動で行う必要があるのではないかと考える。

9　結語

教科書研究では、「実例を用いた提示」「他の学習との関連」「枠組みの規定」「生活化を促す課題」の4つが大きな特徴として表れた。これにより、「体育理論」の単元内容を教える際の指針を示すことができた。また、「授業実践」では演習的授業の効果として、「スポーツの多様性への気付き」と「スポーツの目的意識の広がり、細分化」が明らかになった。このことから、演習型授業は社会学的・運動文化的内容を教える際に有効な授業スタイルであるということがいえる。また、学習者の考えの体系化を促す演習的活動が必要であるということが今後の課題として挙げられる。

10　引用文献

1）中村敏雄（1962年）、「体育理論の指導と教科書」、体育の科学、第12号第3巻、p.115.

2）久保健（2007年）、「日本の体育は『わかる』ことをどう扱ってきたか」、体育科教育、第55巻第2号、p.16.

3）宇土正彦（1966年）、「体育教科書の諸問題」、体育科教育第14巻第11号、p.5.

4）上杉正幸（1983年）、「スポーツ価値意識の類型化に関する一試論」、香川大学教育学部研究報告、第Ⅰ部第59号、p.1-19.

5）戈木クレイグヒル滋子（2009年）、「質的研究方法ゼミナール―グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ―」、株式会社医学書院、第1版増強版第2刷

（指導教員　森　勇示）